

医学フォーラム

「私の歩んできた道」

整形外科の国際交流を目指して

京都府立医科大学名誉教授 平澤泰介

《プロフィール》



生年月日：昭和12年9月20日
 本籍：京都市中京区神泉苑町
 昭和38年3月 京都府立医科大学卒業
 昭和39年3月 インターン修了：
 (U.S. NAVAL HOSPITAL, YOKOSUKA):
 E.C.F.M.G 試験合格 (CERT: 48448)
 昭和40年9月～42年4月 米国カリフォルニア大学 (UCLA)
 整形外科留学 Research Fellow
 昭和47年1月～7月 米国ハーバード大学留学
 (日本リウマチ協会派遣による) Clinical Fellow
 昭和55年9月～56年3月 ドイツヴェルツブルグ (WÜRZBURG) 大学
 客員教授
 平成元年7月 京都府立医科大学教授
 京都府立舞鶴こども療育センター所長兼任
 平成7年4月～9年3月 大学医療センター所長兼任
 平成13年4月 京都府立医科大学名誉教授
 現在 明治国際医療大学教授兼附属リハビリテーションセンター長
 朝日大学客員教授, 京都府医療審議会会長

〔主宰学会〕

国内：日本バイオメカニクス学会, 日本肩関節学会, 国際外科学会日本
 本部会, 日本手の外科学会, 日本整形外科学会基礎学術集会, 他
 国外：アメリカ・日本手の外科学会, ドイツ・日本整形外科合同学会,
 日本・韓国リハビリテーション医学合同カンファレンス

〔名誉会員〕

日本整形外科学会, 日本リハビリテーション医学会, 日本末梢神経学
 会他

銀河鉄道を眺めた子供の頃

幼少期から小生は“雨ニモマケズ, 風ニモ負
 ケズ…欲ハナク…デクノボウトヨバレ”る人間
 になりなさいとって育てられた。“欲ハナク”

“苦ニモサレナイ”目立たない人間になるように
 という教えは小生の生き方の中に染み込んでい
 る。

宮沢賢治の生まれ故郷であるこの田舎町・花
 巻は奥羽山脈, 北上川に囲まれ, ことに夜景は

凜として美しい。都会生活に疲れ、落ち込んだときには、川辺の“イギリス海岸”に寝ころんで澄みきった天空をゆっくりと眺め、帰途についたものである。

第二次大戦終戦直前の数カ月間、小生の家に特攻隊の隊員が泊まっていた。当時20才と22才であった二人の隊員は小学校2年生だった小生にとって、毎夕食後にはトランプをして遊んでくれるやさしい兄貴のような人達であった。“出船”“私は真赤なりんごです”などの歌を唱い、踊り、ドンチャンさわぎをした翌日、二人は家の屋根のかわらが飛んでしまいそうな轟音を残して飛び立ち、帰らぬ人となってしまった。隊員の一人が小生の父親へ書いた遺書には“平澤親父殿、文句を言わずに死のうじゃないか”と書かれてあった。

それから、1年ももしないうちに毎週末、家に外国の進駐軍の兵隊さんが遊びに来るようになった。温泉地でもあり、父は東北大出身の外科の開業医で外国語が話せたこともあってか、母の料理を食べに土曜日の夕方になると2、3人ずつ訪ねてきて、門限の時刻まで楽しいひとときを過ごしていった。小生も“Jimmy”という名前をもらい、膝にのせてもらって“You Are My Sunshine”や沢山のfolk songを楽しく教えてもらった。

特攻隊の兵隊さんも、進駐軍の兵隊さんも20才前後のやさしいお兄さん達ばかりであり、子供の小生にとって心に残る忘れられない人達であった。

子供の頃のこのような心あたたまる思い出が小生の頭の中に住みついてしまったのであろうか、皮膚の色や目の色の違いに違和感を感じない国際的な感覚が知らぬ間に身につけてしまったようである。

1996年民族紛争の厳戒下のユーゴスラヴィアで行われた第一回世界救急外科学会の講演の前置きとして小生は子供の頃のスライドを示して、“特攻隊の兵隊さんも進駐軍の兵隊さんもごらんのように小生にとってはとてもやさしいお兄さん達であった。どうしてこんなにやさしいお兄さん達が殺し合わなければならないの

か”と述べた。これが出席した有識者の目にとまり、ベオグラード大学の客員教授として招かれ、大学の大講堂でアンコール講演を行うことになった。“この大学の外を歩くと、手のない子、足のない子が沢山寄りすがるように近づいてくる。この子供達は罪もなく、地雷を踏んで手足を失ったのだ。これはみんな大人達の責任です”と訴えた。これはユーゴスラヴィアの国営テレビで上映されて、反響を呼んだとのこと、この講演のDVDが帰国後に送られてきた。

米国海軍病院のインターン時代

卒業がせまって海外留学が大きな夢となり洋書：Cecil (内科), Christopher (外科), Eastmann (産婦人科)にかじりつく毎日となった。市内のアメリカ文化センターにも通った。外国留学の登竜門である米国4病院のインターンには約120名の受験生が全国から応募しており、関東座間の米国陸軍病院が試験場と発表された。試験当日には横浜国立大で勉強していた姉の3畳間のアパートに泊めてもらい、翌朝5時に起きて電車で会場に行き、朝9時から夕方の口頭試験まで、気の遠くなるような長い緊張の一日であった。後日、第一希望の横須賀海軍病院から首席合格として“Senior Intern”を務めるよう連絡があった。出頭してみると東大卒4名そして北大、金沢大、千葉大などの卒業生16名であった。病院の住所はSan Franciscoであり、全寮制かつ英語のみのスーパーローテーションの生活となった。仕事が始まるとベトナム戦争の負傷兵が続々と空輸されてきてSick Call (救急室)は昼夜を問わず救急対応に追われた。無事カルテを記入し、処置を終えて、夜中3時や4時に病院の長い廊下を自室に引き返す日課となった。さらに手術も多く、授業は厳しく遅刻すると講義室に入れてくれず、居眠りをすると授業終了まで立たされるというもので、カンファレンスの報告も受持患者の検査値は暗記して、原稿を手にする発表は禁止であった。年末になると疲れが出たのか16名のメンバー中9名が入院することになった。小生はインターン長のため、休養者の穴うめをすることとなったが、何とか病

気をせずに一年間務めることが出来た。インターン終了近くには難関とされた海外医師留学試験 (ECFMG) に挑戦・合格、母校の大学院入学試験や国試も含めて張り詰めた毎日であった。

しかしながら、海軍病院での生活はつらいことだけではなかった。インターンには、それぞれスタッフドクターがスポンサー (後見人) となって相談にのってくださるシステムがあった。小生には米国4軍病院インターン委員長 (Chairman) の Dr. R. Faucett がその役を務めてくださった。とても親切なご夫妻で週一回は自宅への夕食会に招いてくださり、週末には熱海などへドライブしてご馳走してくださった。小生にとって、ご夫妻の親切とやさしさは、一生涯忘れられないものとなった。

インターン終了式は大講堂で開催され、米国の公使をはじめとする要人、そしてインターンの親族などで満員となった。小生はインターンの代表として Oath of Hippocrates を壇上で宣誓するという栄に浴した (図1)。

またインターン終了直前にはNHKテレビの取材があり、回診風景や実習現場などが全国放映されて“インターン制度”の話題を全国に提供することができた。後にこの16名のメンバー

から、9名の国内外の大学教授が誕生した。

カリフォルニア大学 (UCLA) 留学時代

入局してまもなく諸富武文教授から、四肢や体幹を支配する神経の損傷と修復はこれからのトピックスになるから、これを研究するようにと命令された。文献を調べたところ、カリフォルニア大学整形外科の L. Marmor 教授が世界的な権威であることがわかった。さっそく手紙を書いたところ、すぐに Research Fellow で来るようにとのことであった。これを教授に話したところ“お前のような何も知らないものが、アメリカに行くとは日本の恥だ”といわれて推薦状にサインをしてくださらなかった。教授のご自宅を訪ねたり、色々試してみたがうまくいかず、ある日回診のあとに教授室に入りこんでサインをいただいたところ、ペンにインクがついていなかった。サインのないまま、それを Dr. Marmor に送ったところ、Marmor 教授からは1965年9月から67年4月まで、研究のみならず、ECFMGの資格があるので、手術の手伝いもするようにと連絡があり、高額な給料まで明示してあった。府立医大大学院に籍をおいたまま、留学が決定してロスアンゼルスに飛んだ。アメリカ到着時、



図1 米国海軍病院インターン修了式 (Faucett先生は前列右より3人目、筆者は2人目) 1964年

上空からみたロスアンゼルス夜景はダイヤモンドがちりばめられたような美しさで、この世界で何が起るのだろうかと思いつつ、期待と不安と緊張が心の中に渦まいていたことが今も忘れることができない。

ロスでの生活は朝6時、暗いうちに Marmor 教授がアパートの前まで車で迎えに来てくださり、Bel Air 記念病院で7時から手術、そして終了後に UCLA Medical Center に移り、9時から午後5時まで研究という一日であった。手術は理論的で、手際良く進められ、小生にもあとで一人で手術ができるようにと手をとるように教えてくださった。ロスは気候がよく、雨が少なくアメリカ全土からリウマチ患者が移り住むところで、ほとんどの手術が関節手術であった。研究室は2つ与えられた。Medical Center 内の整形外科の研究室のとなりにはスポーツ外傷で有名な Blazina 教授そして、リハセンターの研究室のとなりには骨の研究で有名な Urist 教授がおられ、大変恵まれた環境であった。整形外科の研究は神経の同種・異種移植についてであった。4人の優秀なテクニシャンの協力により帰国時には神経研究の権威である J. Neurosurgery (27, 5: 401-414, 1967), Archives of Neurology (18: 445-448, 1968) など4編に研究をまとめることができた。リハセンターでは「医師のための義肢装具研修」という2週間研修コースに参加させてくださり、“A” grade (90点以上)で合格し、“Miracle of Orient”と教授達にほめていただいた。これは小生が教授退官後に日本リハビリテーション医学会で評価されて、理事・監事を10年間務めるきっかけとなり、遂には名誉会員に推薦されることになった。「いつか役に立つから受講しなさい」といった Marmor 教授の“先見の明”に感謝するばかりである。

留学期間終了近くになって Marmor 教授は諸富教授との折り合いが悪かったことを察してくださり、世界外傷学会の折りに太平洋沿の美しい町 Santa Barbara の Hotel の sweet room に諸富教授と小生を招待してくださった。となりの部屋には世界的な骨折の権威、ドイツの Küntschner 教授が泊まっておられ、プールなどで打ちとける

ことができた。このときのテニス大会で Marmor 教授と小生とがペアを組んで勝利をあげたのを、熱心に応援してくださった諸富教授は自分の着ておられたポロシャツを脱いで小生に着せてくださった。また私事にわたって申し訳ないが、この学会のあとみんなでロスに帰り UCLA 近くの Bank of America の最上階のレストランで夕食会が開催された(図2)。この時ロスの日本人会で会った奈良女子大から UCLA 大学院に留学中であった京都出身の女性をフィアンセとして紹介させていただいた。ちなみに彼女とは結婚して、帰国後に二人の男子を得て現在に至っている。

ハーバード大学留学の頃

帰国後、諸富教授に命じられたのは“リウマチ外来”の担当であった。幸い UCLA で教えていただいた理論的かつ冷静な手術の手技を活用することができた。数年して教授から日本リウマチ学会の Travelling Fellow に応募するよう命令された。Navy, UCLA とつづき、やっとゆっくりしたときだったので抵抗を感じながら従うことにした。思いがけず採用が決定されて、留学生担当の岡山大・児玉俊夫教授がこまかにかつ親切に対応してくださった。1972年1月から奨学金100万円がつづくまで留学することが決定した。小生希望の Harvard 大学の軟骨研究で高名な C. Sledge 教授の下で Clinical Fellow として7月まで留学することになった。他学の名も



図2 Marmor 教授(右)と諸富教授 UCLA 近くの小生のアパートの前で、1967年

ない若手医師なのに、こまやかに交渉を進めて下さった児玉教授には大変頭が下がる思いであった。

Harvard 大学に関しては同じ R. B. Brigham 病院に留学しておられた内科の近藤元治先生（現名誉教授）からの情報で何となく親しみを感じていた。ちなみに、近藤先生、井端泰彦先生（元学長）をはじめ、米軍病院のインターンの先輩の立岩敏朗先生、北村和人先生もテニス部員であることから、テニス部コンパは種々の情報が交換でき有意義なものであった。後輩としては、吉川敏一現学長、高松哲郎現教授、久保俊一現教授、夜久均現教授達もおり、活発な部活であった。

さて、ボストンの冬は雪が深く、中古車を乗りこなすのは大変で、駐車違反のレッテルが貼られることが多かった。連日続く手術では外人の大きく、重い足を持ち挙げて、人工関節を挿入する操作が多く、手の指が痛む日がつづいた。月から木曜日まで股関節、膝関節の手術、金曜日には手の手術というスケジュールで、土曜日にはマサチューセッツ総合病院（MGH）でのカンファレンスに出席した。手の外科では世界の権威 Nalebuff 教授の指導の下で感激しながら手術を行うことができた。合間をみて軟骨移植の研究を手伝い、Sledge 教授の医学部・工学部合同の講義を手伝った。工学部の学生と同席する整形外科の授業は新しい方向性を示し、興味深いものであった。冬から春となり、New England の緑の美しい季節となり、週末にはドライブや魚つりを楽しむことができた。その後、外国嫌いで通っていた Sledge 教授が愛嬢とともに京都に来られ、講演と桜で美しい京都の散策を満喫していただいた（図3）。

ドイツの客員教授の頃

やがて諸富教授が退官され、榊田喜三郎教授の時代となった。教授は骨折治療の大家であり、今まで神経などの軟部組織を中心に研究してきた小生にとって骨折治療は新しい興味深いテーマとなった。教授交代により、小生は「手の外科」の担当となった。



図3 Sledge 教授（前列右から2人目）と娘さん（左端）、筆者右端、京都の学会にて、1993年

多くの国際学会に出席しているうちに、ある日突然、ドイツの A. Rütt 教授からドイツに来ないかとの手紙が舞い込んだ。中部日本整形災害外科学会の会長であった榊田教授に相談したところ“教授でなら止むを得ない”というお返事をいただいた。さっそく Rütt 教授に手紙を出したところ、“外傷学担当の客員教授（Guest Professor）として手術の指導を行うという条件で月給とゲストハウスを提供する”ということであった。当時小生は助教だったので大変光栄なことであった。契約は1980年9月から1981年3月末までということまで渡独が決定した。

ドイツに着いて驚いたのはヴェルツブルグ（Würzburg）は8世紀に司教座のおかれた古都でバロック風宮殿、ロマネスクの大寺院、丘の上の古城が美しくスイスまでつづくロマンチック（中世）街道の出発点であった。Würzburg 大学は病理学者の Virchow、X線を発見した Röntgen らが教鞭をとったところで、江戸時代の蘭医シーボルトの出身校でもあった。

アメリカの大学病院の雰囲気とは大きく違い、Rütt 教授を頂点とする17名の医師のピラミッドで成り立ち、ドイツでは医師は尊敬の度が高く、医療訴訟は大学ではほとんど生じないとのことであった。以前の日本と同様に回診は大名行列でみなピリピリしていた。手術場は神聖な所なので“敵国”の英語は使わないようにとい

うことで、小生のドイツ語の上達には好都合であった。回診がすむと医局員が寄ってきて、一日おきに小生を自宅での夕食に招待していただき、小生は全員と心底から親しくなることができた。夕食会ではワイン、ビールで盛り上がり、帰りには翌朝用のサンドウィッチとスープを手渡してくれるやさしさであった。レントゲン教授にちなんだ講演会では神経修復術について述べ、その論文を *Ber. Physico-Medica* (88, 233-240, 1981/83) に掲載してくれた。また昔の学者が“月沈原”と訳した Göttingen 大学でも講演の機会をくださり、教授宅で家庭料理を御馳走して下さった。

小生がテニス好きなのを知って、Rütt 教授は毎週水曜日夜 8 時から医局員とナースを集めて、テニス大会を開催して下さり、その後はワインパーティと夕食会となって、Unterfranken の篤い人情に触れる機会を作ってく下さった。

帰国に際し Rütt 教授は若手医師を指導して 110 例の手術を無事にこなしたことに敬意を表して長文の修了証書とマイセンのティーカップをおみやげに下さった (図 4)。

また思いがけないことにドイツ滞在の 2 カ月目に初秋の中心街を歩いていたところ、解剖学の佐野豊教授にばったりお逢いした。先生は府立医大の学長を 2 期務められ、次の 2 期に就任される interval を利用して Würzburg 大学の解剖学教授として滞在しておられた。それから数カ月間高名な佐野教授とおつきあいできるとは、

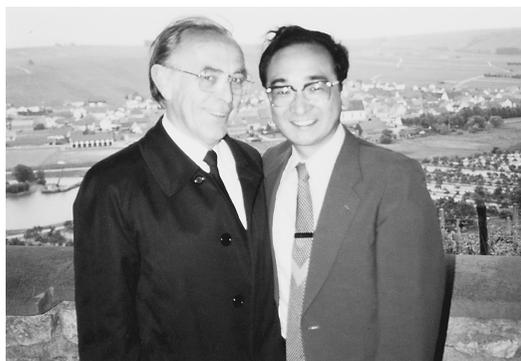


図4 Rütt教授とともに、ドイツ Würzburg の古城にて、1980年

願ってもない幸運であった。先生とは週末にハイデルベルグやミュンヘンなどへ汽車旅行をすることができ、先生の知人を訪ねたり、中世ヨーロッパの文化と人情に触れることができ、忘れられない思い出が沢山できた (図 5)。

1986年には榊田教授の提案で Würzburg 大学との合同カンファレンスが行われた。医局員 11 名と家族、総勢約 20 名が大挙して Würzburg を訪ねた (図 6)。Rütt 教授をはじめ小生のなじみのスタッフが大歓迎して下さり、医局員が観光ガイドを引き受けて、バスで街中をまわり、レセプションではライン・ドナウ両川の水源地となる丘の上でアスパラガスを主食とした風変わりな食事とフランケンワインで盛り上げて下さった。カンファレンスでは全員立派に発表をすませ、日独両教授も大満足して下さり帰途につくことができた。

主任教授となって

大学卒業数年後、外国留学経験者が集まった折“こんな小さな島国の中で各大学に分かれて研究するよりも、大学の“かきね”をとって交流しよう”という提案があり“かきねの会”が発足した。会では、学会で話さない内容を年 4 回、夜を徹して討論しようというもので、山室隆夫 (後に京大教授)、福田真輔 (後に滋賀医大教授)、圓尾宗司 (後に兵庫医大教授)、越智隆弘 (後に阪大教授) などの若手メンバーが集まった。そして、この会を 20 数年継続したところ、全員が



図5 佐野教授と P.Hirayama 先生 (左端筆者)、ドイツ Schwarzwald にて、1980年

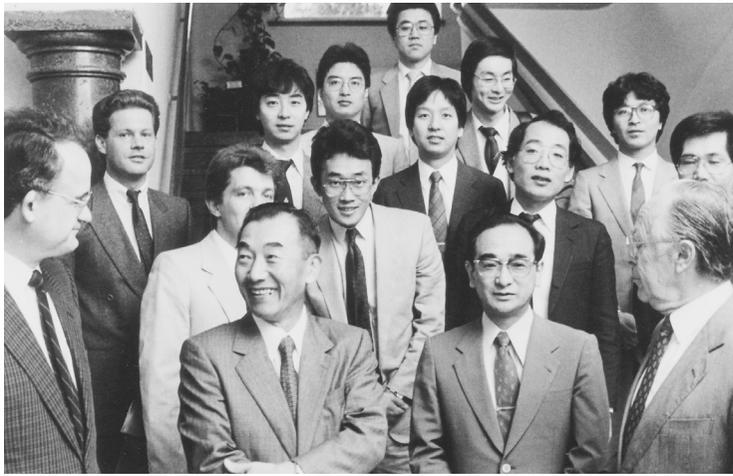


図6 ドイツ Würzburg 大学にて，前列左から Küsswetter 教授，榊田教授，筆者そして Rütt 教授，1986 年

大学教授になってしまった。幸い小生は京大との合同カンファレンスを開いて交流した上に、京大同門会に招かれて“血液透析と骨病変”の講演をすることもできた。その後、東大では“開放骨折と偽関節の治療”北大と東北大では“スポーツ外傷”，広島大では“末梢神経損傷”などと講演する機会が出来，“かきねを取ろう”と訴えた。

1989年7月から榊田教授の後任として教室を担当することになった。そのときの小生の方針として、小生の留学した大学に2年程度ずつ医局員を留学させるということで先方の大学の了承をえた。そのうわさを聞いた全国の卒業生は北は北大から南は琉球大まで多くの入局希望者があつた。医局長や助教授の協力の下に人選した結果、小生の在任12年間で160名を越える入局者があつた、大きな科に発展することができた。

分野の広い整形外科を榊田教授の外来方式で発展させてみると以下のようになり、各分野に力のある専門医が若手医師の指導にあたることになった。専門外来別にみると、「股関節外来」久保俊一先生（現本学教授，ハーバード大学），「膝外来」高井信朗先生（現日本医大教授，カリフォルニア大学），「リウマチ外来」山下文

治先生（オクスフォード大学），日下義章先生（現朝日大学教授・ドイツ），「腫瘍外来」楠崎克之先生（特認教授，ハーバード大学），「脊椎外来」長谷齊先生（現本学教授（学内），ドイツ），「骨折外来」井上望先生（現米国 Rush 医科大学教授），「小児外来」金郁結（現准教授，Mayo Clinic）「足外来」野口昌彦先生（ピッツバーグ大），「形成外来」石田敏博先生（東大研修）などである。

さらに、「手の外科外来」では小生のテニス仲間の米国 Mayo Clinic の EYS Chao 教授と2年ずつの研修の約束（Fellow）が出来ていたので玉井和夫先生（現松下病院部長），奥田良樹先生（現京都第二日赤病院部長），田中進治先生，中尾洋子先生達を送り出した。また勝見泰和先生（元明治国際医療大教授，オーストラリア留学）に Eastern Virginia 大学から帰国した岡島誠一郎先生も加わり、神経移植や指の再接着など、多くのマイクロサージャリーの業績を確立した。

教室の研究テーマである諸富武文教授の時からつづいた末梢神経外傷の修復は神経再生メカニズムから神経剥離，縫合，自家移植へと進み、外来患者の follow up は1000例を越えるほどになった。研究と臨床のまとめは世界的権威のある Clinical Orthopaedics (188: 191-196, 1985) や Bone&Joint Surgery (67-B, 5, 814-819, 1985)

に採用された。これらの業績により、2004年から名大祖父江逸郎教授の後任として日本末梢神経学会の理事長に推薦された。なお、神経修復術後の脳における受容 (perception) を追跡する functional MRI の研究は脳外科の成瀬昭二先生との共同研究で可能となったもので、2011年中国北京でのリハビリテーションフォーラムで発表して、優秀発表賞を得ることができた。

日本の骨折研究は保田岩夫先生 (当時助教授) の骨圧電気の発見に始まるといえよう。これはコラーゲン線維で形成される骨に“ひずみ”を加えると微小電流 (piezoelectricity) が生じるという世界的に注目される研究である。前述の Mayo Clinic の EYS Chao 教授は保田先生の研究を世に出すため、世界的に有名な Gordon Research Conference で発表させたいからお手伝いすることようにとの依頼があった。保田先生はこれを了解して、小生を共同研究者として発表するので毎週自宅の研究室に来て研究を手伝うようにと示唆された。奥様はいつも夕食を御馳走してくださり、「主人がやっと家で食事をするようになった」ととてもよろこんでくださった。同門の先輩・岡田皖先生達の支援もあって、数カ月してやっと論文が完成し、1982年8月アメリカ北東部 New Hampshire の Gordon Research Conference に遠征することになった。5日間つづく研究発表会で世界から集まった研究者から沢山の質問があり、共同研究者兼通訳の小生にとって長い日々であった (図7)。(Yasuda I, Hirasawa Y, Tanaka S: Experimental study on piezoelectricity of bone using non-contacting method. Piezoelectricity of bone & electrical calls. Fuji Printing Co, 301-304, 1984: 保田先生最後の論文となった)

帰国して保田先生の微小電流の研究を教室として進めていくことを模索したところ、骨折や最近よく行われる脚延長術に応用することを考えついた。骨接合部や延長部に生じる仮骨の強さを AE (acoustic emission) という微小音響でとらえる方法である。用いられる創外固定を介してひずみを加えると仮骨部がこわれかけて微小音響が生じるのでこれをコンピューターで増巾して仮骨の強さを知り、早期運動療法に役立つ



図7 米国 Gordon Research Conference にて保田先生とともに、1982年

てるといものである。高井信朗先生、井上望先生、渡部欣忍先生、金郁喆先生達の協力で進め、脚延長術や開放骨折の症例を中心に用いて良好な成績を得た。これは西太平洋学会 (WPOA) で Best Paper 賞を、ドイツ整形外科学会 (DGOT) では Best Poster 賞を獲得して、Clinical Orthopaedics (402: 236-244, 2002) に記載された。

国際学会の開催をめぐる

日本とドイツの整形外科合同学会など多くの学会を主催する機会があったが、なかでも「手の外科」学会が最も印象的なものである。“手”とは運動器の中で最も治療のむずかしい器官と考えられ、腱・血管・神経・骨などの修復を完全に行わなければ、脳の“派出所”として、また第2の“目”としての機能を十分に回復させることができない。多くの専門外来に分かれる前には整形外科医の技量は「手」の処置の仕方によって評価されることが多かった。卒後2年目でアメリカ手の外科学会に出席したときは、高名な手の外科専門医の議論にはとてもついていけなかった。UCLA の Marmor 教授がそれを察してか、手の手術を丁寧に指導してくださった。そして30年。まさか小生に日本とアメリカの合同学会の会長の役がまわってくるとは

思ってもみなかった。勿論、米国海軍病院インターン時代の先輩・東大の医局長・山内裕雄先生（現順天堂大学名誉教授）や Mayo Clinic の W.P. Cooney 教授らの推薦があったからであるが…。

2000年3月ハワイのマウイ島 Ritz Carlton ホテルで「日米手の外科合同学会」は両国の専門医550名を集めて開催され、ミュージシャンやプロ野球選手の手術の担当で知られる高名な医師達も参加して下さりうれしい限りであった。開会の辞、レセプションの挨拶、そして閉会の辞までであったという間であったが、緊張の連続の一週間であった(図8)。イギリス Oxford の British J. Hand Surgery 25B 巻5号の巻頭 PROFILE の一頁全体に小生の大きなカラー写真とともに略歴が掲載され、合同学会の成功がたたえられたのは光栄の至りであった。

第2の人生へ

退職の差し迫った秋、東北大学で講演しているところに国立リハビリテーションセンターの初山泰弘総長から電話があり、帰りに東京の帝国ホテルに立ち寄ってほしいとのことであった。内容は自分の後任としてセンターに赴任して欲しいとのことであった。先生はその後2度京都まで足をはこんでくださったが、「私はこれ以上“上”は望まない」とお断りさせていただいた。

それから間もなく、不思議なことに今度は日



図8 第3回日米手の外科合同学会 (Maui 島) にて学会長として、26年前の第1回会長 Campbell Clinic, Milford 教授夫妻とともに、1993年

本リハビリテーション医学会から、理事として国際委員会を創設して欲しいかの依頼があり、これは了承させていただいた。そして理事3期6年、監事2期4年の間、学会役員として、多くの若手医師を海外留学させ、また海外からの高名な医師を名誉会員などの役職についていただき国際交流に努めることができた。

また2004年に日本リハビリテーション医学会の最初の国際学会である“日本・韓国合同リハビリテーションカンファレンス”を京都国際会議場で盛大に開催することができた。

最近是中国の「北京国際リハビリテーションフォーラム」から講演依頼があり、5年連続して講演する機会に恵まれた。招待講演として「運動器の疾患とリハビリテーション」というテーマを中心として講演を行っている。これまで中国では西安、大連、北京と10回近く講演しているので中国語の挨拶も流暢になったようで、昨年11月の講演のしめくりとして“希望 今後

我能加倍努力 使 中国日本間的 友好關係 更上一層樓!!”と言ったところ満員の会場から大きな拍手が湧き、しばらく立ちつくす場面があり、そして閉会式で「優秀発表賞」を授与された。医療を通して国際友好の向上に尽くした感動があった。

ま と め

人生の「むすび」をまとめつつ、父の実家を調べたところ埼玉の400年つづいた荘園の名主(庄屋)であり、また母の出生地が三条木屋町上ル材木町であることもわかり、そのそばで生きていることに人生の不思議な巡り合わせを感じるし、本籍を花巻から京都にしたのも、ただもとに戻しただけだったのだ。

タイミングよく本年2月、京都新聞の「京まなびの系譜」(第5回)に小生のことが“独歩”というテーマで掲載されていた(図9)。

以前ドイツに滞在中に宮沢賢治(38才で肺結核にて死亡)の主治医をされた佐藤隆房先生(花巻病院長、当時91才)からお手紙をいただいた。それには「出来秋は雨か嵐か知れねども今日一日の田の草をとる(百姓歌)…栄達を夢みて勉

